
バカと楽しく過ごしてく

ティル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと楽しく過ごしてく

【Nコード】

N1884V

【作者名】

ティル

【あらすじ】

バカテスの世界に転生した神上真也。この世界で仲間と楽しく馬鹿をやって行くと決めた。

これは「数多の世界への始まり」から続く世界のひとつです。

プロローグ（前書き）

初めての二次創作です。

プロローグ

みなさん、こんにちは。神上真也だ。俺はバカテスの世界に転生した。転生するさいにいろいろ強化にもらった。運動神経や身体能力、動体視力等、そして頭の良さ、回転力や決断力、そして記憶能力の向上をもらった。

ちなみに明久や姫路の幼馴染だ。しかし、明久の奴、すごいなあ。原作の姫路ラブレターに書いてあったとおりだ。いつも楽しそうで、人の事考えれて、人のために動いたりする。こりやもてるわけだ。俺も、明久と一緒に行動したりしている。

やっぱり原作のキャラと一緒にいてすごく感動と言うのもある。でも、一緒にいて面白いし一緒にいたいと思う。それは、一人の人として。友達として・・・だ。

そして、俺と明久は親友になった。

そして時間が過ぎ、ついに高校1年最後の日。そう、振り分け試験だ。ここまでいろいろあったな。まあ、その話はまた今度。教室に行く途中、友人（悪友）の雄二と明久を見かけた。

「よう2人とも」

「あ、真也。おはよう」

「よう、真也」

挨拶をしてから、雄二が明久に問題を出した。

「それじゃあ、小手調べの問題だ。『三権分立』は『司法』と『立法』とあと一つは何だ？」

「ふ、あまり僕を見くびらないでよ、雄二」

確かに、こんなすぐわかるだろ。

「二つまで絞れる」

・・・二つ？

「ほう」

うん。あの顔、雄二も同じこと思ってるな。

「『憲法』か・・・『漢方』かのどいらかだったはずだ」

「・・・『行政』だ」

「お前それ語感似てるから言っただろ」

よく漢方なんて選択肢でできたな。

「んじゃ、次俺な」

「ええ！！真也が！？」

「なんだよ、その反応」

「だって・・・。難しいの・・・出さないよね」

「安心しろ。簡単だよ」

お前はどうかは知らんがな。

「それじゃあ、OPECとは何のことだ？」

「・・・」

「・・・」

「え、英語は・・・苦手なんだ」

「いやいやいや！これ社会の問題だぞ！」

大丈夫かこいつ。あ、雄二も呆れつつうか諦めてる感じ。

「じゃあ、ウチからも」

この声・・・島田か。

「それじゃあ、基礎問題ね。CH₃COOHとは何のことでしょう？」

「・・・」

「・・・」

「島田さん・・・さっきも言ったけど僕、英語苦手なんだ」

「え・・・これ化学の問題」

「お前、英文字入ってたら全部英語なのか」

「じゃあ、僕こっちだから」

あ、逃げた。つか俺も同じ教室だし。

でも安心したな。これで明久はFクラス確定だな

俺もFクラスに行きたいしな・・・名無しでいいか。

教室中に、ペンの走る音がする。そして・・・

「ガタツ!!!」

姫路が倒れる音がした。

「「姫路さん!」」

明久と一緒に駆け寄る。

「はあ・・・はあ・・・」

姫路が苦しそうにしていると先生が寄ってきた。

「試験中の途中退席は無得点扱いになるがいいかね？」

・・・こいつ、むかつくな

「ちょ、ちょっと待ってください！体調を悪くして途中退席で無得点扱いなんて酷いじゃないですか!」

「そうだ！せめて今解いてある問題だけでも点数に入れられないのか！」

俺と明久が抗議する、が

「規則だ。神上、吉井、お前たちも早く席に戻りなさい。無得点扱いにするぞ」

と言われた。

こいつ、まじでむかつくな。

「う・・・」

明久は言いくるめられたが、俺は

「明久、お前はテストを続ける」

無得点扱い結構。むしろ上等。

「真也！？でも・・・」

「いいんだ」

俺は姫路を抱えた。本当は明久がするべきなんだがな。

「神上。君も無得点扱いになるぞ」

「ええ、いいですよ。それでは、俺はこれで」

俺は姫路を保健室に連れていった。

「はい。もう大丈夫」

「そうですか」

保健室に連れて行き先生に姫路をあずけた。薬を飲ませたみたいだ。さて、試験もなくなつたし帰るか。

「それでは」

「帰るの？この子は？」

確かに、心配だが

「姫路は優しいですから

ね。俺がここにいること自分のせいにしてしまいそうですから。それに・

・・

俺ははつきりと

「Fクラスに行けて、結構嬉しいですよ。友人達と馬鹿できるんですからね」

俺は嘘偽りのない言葉を言った。

「・・・そう。わかったわ」

「それでは、お願いします」

さて、これから楽しくなってきたな。がんばるか

姫路Side

「ん・ん」

ここは……。私試験受けてて……。あ・・そっか。気分悪くなっちゃって倒れちゃったんだ。

「あ、起きた？」

保健室の先生が聞いてきた。

「あ・・はい」

私はベットから出た。
でも・・

「あの・・どうして私、ここに？」

「あゝ。えっと・・」

先生が言い辛そうにしている。

「えっと・・。あゝ、神上君ごめん」

「え・・・」

どうして神上君の名前が
まさか・・・

「ここにあなたを連れてきたのは、神上君なの」

「そんな・・・」

私のせいで、神上君が。

「あゝでもね、神上君は悔やんでなかったし、むしろ喜んでたわよ。
友達と馬鹿ができるって」

「・・・そう・・・ですか」

苦しかった胸が少し和らいだ。
そっか・・・神上君らしいや。

「先生、ありがとうございました。もう帰ります」

「そう、わかったわ。気をつけて」

「はい！」

私は話してくれた先生に

、そして保健室に連れてくれた神上君に感謝しながら帰った。

神上君、ありがとうございました。これからよろしくおねがいします。

プロローグ（後書き）

これからまた、がんばっていきます。

1話・・・でもプロローグっぽい(前書き)

今回も短いです。そしてキャラ設定を

神上 真也

かみじょう しんや

身長 173cm

体重 64kg

体格 明久と雄二の中間
の体つき

性格 面白そう、楽しそうな事なら自分から行くタイプ。でも、面倒ことは嫌。しかし、人のためや困っているなら、やる

顔 TOGのアスベル似

で髪もほとんど同じ。ただ色が黒。

では、本編をどうぞ

1話・・・でもプロローグっぽい

桜の舞う中、俺は文月学園を目指して歩いている。
。と言ってももう着くけど。

「神上、ギリギリだぞ」

「ああ、すいません。につしー先生」

「お前も、素直に『西村先生』と呼べんのか？」

「いいじゃないですか。愛称ですよ。好かれてる証拠です」

「中には貶してるのもあるがな」

たぶん『鉄人』の事だろう。

「ほら、受け取れ。お前のだ」

結果の紙を渡された。

まあ、見なくてもわかりきってる事だが。

「どもつす」

一応受け取っておく。

中を見たら『F』と書いていた。

「にしても惜しいことをしたな神上。お前ならAクラスは確実だったろうに」

先生は気の毒そうに言ってくる。
まあどっちみちFクラスに行くつもりだったかな。

「だが、お前は人として良い行いをしたと俺は思うぞ」

「・・・ども」

。なんか、あの『鉄人』にほめられるって照れるな。

「お前のその人の良さがあの幼馴染にも少しでもあればなあ」

明久の事だろう。
でも

「俺は、そうは思いません」

「む・・・」

「あいつはあいつなりに人のこと、考えれるんですよ」

「・・・そうか」

あいつはバカなだけだ。

あいつの良い所はたくさんある

後ろを向くと、明久が歩いてきた。

「よう、明久。おはよう

」

「あ、真也。おはよう。鉄じ・・西村先生、おはようございます」

「今、『鉄人』と呼ばなかったか？」

「ははは。気のせいですよ」

絶対言おうとしてた。

「まあいい。吉井もう少し早く来い」

そう言つて明久に、封筒を渡した。

「どーもです」

そういえばここで先生が明久に「お前はバカだ」って言つんだっとな。

よし、俺が言おう。

「なあ明久。今だから言うけど、この一年間お前を見て『こいつ実はものすごくバカなんじゃ』と思っていたんだ」

「ああ。俺もそう思っていた」

先生も俺の言葉に同意する。

「あはは、嫌だなあ二人とも。そんなんじゃ『節穴』ってあだ名がついちゃうよ」

「ああ。だから明久、今なら自信を持つてこつ言える」

そして明久は封筒空けた

『F』

その文字が見えた瞬間、俺と先生は声を合わせて言った。

「「明久（吉井）。お前は正真正銘のバカだ」」

こうして俺たちは、Fクラスに行くことになった

2話・・すぐ中途半端（前書き）

結構間が空きました。すみません。

さて、いきなりお気に入り登録してくださった方々が。本当にありがとうございます。
では、どうぞ

2話・・すぐ中途半端

「あゝあ。まさか、Fクラスなんてなあ」

「当然だろ」

「でも、十問に一問は解けたんだよ!」

「だからだろうが!」

こいつ、それでよくCかDクラスだなんて言ってたな。

「うわ!」

「ん、どうしたんだ明久って、ああ、なるほど」

驚いた明久の目を追うとそこには、Aクラスがあった。

すごいな。アニメや漫画で見るのとは大違いだ。

教室自体広いし、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備。冷蔵庫のなかには飲料水が入ってるし、菓子まである。紅茶があるって贅沢すぎだろ。高級ホテルも真つ青な設備だ。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

お、高橋女史が自己紹介してるどころか。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来

てください」

「……はい」

・・・霧島、か。

あいつとは去年、色々あったからな。主にあいつ関連で。ホント、一途だな。あいつも気にはしてるんだし、付き合えばいいのに。あれか？シャイってやつか？

さて、俺たちも急がなきゃな。

「急ぐぞ明久」

「あ、うん」

「・・・廃墟？」

そう言わざるをえないだろ、これ。

「ひどいね」

「ああ。とても設備つつつか教室とは言えん」

ぼろぼろにも程がある。てかここまで来るのにほかの設備見てきたけど、他はまだまともだと言える。が、Fクラスだけめちゃくちゃひどいな。

「まあとにかく、入るぞ明久」

「うん」

ガラ！

「おはようございます」

俺が入る。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

明久（ウジ虫野郎）が入る。

「早く座れ、このウジ虫野郎」

うん、確かに今のはそう言いたくなるほどイラついた。本人は陽気に登場したかっただけかも知れんが。

「聞こえないのか？ ああ？」

「雄二、そのくらいにしておけ」

さすがに言いすぎ。

「ん？真也までいるのか？」

予想外だったのか、雄二は少し驚いて言った。

「ああ。で、なにしてた」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

子供か、お前は。

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

そう言うと雄二はニヤリと口の端を吊り上げた。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

戦争の・・・か。

「席は？」

一応聞く。

「適当だ」

「決まってるのかよ」

まあ、これで決められてても困るな。

「んじゃ、俺は一兵隊としてがんばるよ、隊長」

「ああ」

席に行く前に俺たちはそんなやりとりをした。

しばらくして先生が入ってきた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の」

そう言って後ろを向いたが

「福原慎です。よろしくお願いします」

チョークがなくてやめた。つかチョークって主に先生が使ったよな。いいのか、おい。

「皆さん全員に卓袱台、座布団は支給されてますか？ 不備があれば申し出て下さい」

教室としての不備なら一目瞭然なんだがな。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

と、クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください」

不備聞いた意味あるのか？

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

自分でかよ。てか折れてる、折れるってわかりきってたな、支給した側。

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

新しいのにすると言う選択肢はなしか。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

Aクラスとは間逆の対応だな、おい。てかこれらって、廃棄する予定だった物とかじゃないのか。なんかそんな気がしてきた。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

お、ようやく自己紹介シーンか。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

お、早速秀吉か。あいつとは、入学式、帰りになんか絡まれていた（おそらくナンパ）所を助けて仲良くなった。
・・・時々友情以上の視線がくるのは気のせいだよな？

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

そう言って座った。横では明久がなんか悶えている。そういえば小

説では最初はまだ秀吉は男と認識してたな。俺は大丈夫だけど。

「……………土屋康太」

まじ短いな、ムツツリーニ。あいつも、会った時期はだいたい入学式ごろだな。なんかいきなり勧誘された。ムツツリーニ商会に。

「——です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——」

お、この紹介は・・・さて明久のほうを見ると、

「趣味は吉井明久を殴ることです」

女の子の声で希望が出てたのに、一気に絶望した顔になった。島田、ツンデレ乙。

さて、明久の番だな。耳ふさいど。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアーリーーン!!』

ノリのいい奴らだ。不愉快だけど。

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

そんな顔するならやんなきゃ良かったのに。さすがバカ。さて、俺だな。

「神上真也だ。これからよろしく」

こんなもんだろ。さて次は――

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

おっと真打登場か。うん、元気そうだな、姫路

2話・・すごく中途半端（後書き）

中途半端ですみません

3話・・・ようやくひと段落？（前書き）

まだ全然書いていないのに、これを見ていてくれて、ユニーク、評価をしてくれ、お気に入りに入れてくれている。それを見ているととてもうれしく思います。まだまだ不定期で未熟者ですが、がんばります。

それではどうぞ。

3話・・・ようやくひと段落？

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします
……」

福原さん（さん付けはなんとなく）が自己紹介を頼むとすぐさま自己紹介をした姫路。せめて息ぐらいは整えようぜ。・・・いや、整えさせてやるうぜ、か？

「はいつ！ 質問です！」

いきなりかよ！？

「あ、は、はいつ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

言い方によっては失礼だな、それ。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聴き、クラスの奴らは『ああ、なるほど』とうなずいた。

『そう言えば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

突っ込んでる奴（等？）はまとも・・・だな？

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そう言つて自己紹介を終え、座る姫路。

「き、緊張しましたあゝ……」

うん、ねぎらつてやるか。

あ、でも明久が話しかけるな。その後でいいか。恋路に関してはからかったりするけど、邪魔はしない。・あんまりな。だが、面白くなったりしたらそっちに持っていくけど。

「あのさ、姫——「姫路」」

さすが雄二、狙つてるとしか思えない。あ、明久がまた絶望した顔してる。

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

そう言つて深々と頭を下げる姫路。ホントいい育ちしてるんだよな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

お、ようやく話できたな。

「あ、吉井君。はい、もうすっかり平気です」

あれ？普通に返した。・・・まあいいか。

「姫路。明久がブサイクですまん」

いきなり、ひどいな！おい。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」

おや、今度はちゃんと慌てて返した。・・・まあ（ry

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰？」

あれ？ 姫路何も聞かなかったな。 ・ ・ ま（ry

「確か、久保——」

「 ・ ・ ごくつ」

「——利光だったかな」

久保利光、知らない人は名前から連想できるだろう。 まごうことなき_ひ（オス）である。

「.....」

「おい明久。 声を殺してさめざめと泣くな」

「お前がそうしたんだろ。 でもよかったな、 明久。 綺麗だったよ」

暇になってきたので俺も入ることにした。

「か、神上君！？」

姫路さん？ なぜそこで、 言いよどむんですか？

「ああ、 そうか。 ブサイクなのは真也の方が」

「喧嘩売ってんのか雄二」

なら、 遠慮なくヤルぞ？

「そ、そんな！そんな事ありませんよ！！顔のラインも整ってるし、キリッとしてるし、全然ブサイクじゃないですよ！！」

「・・・どうも」

こう言われると、さすがに照れるな。

「まあ明久のは半分冗談だ。安心しろ」

「え？残り半分は？」

「おい、俺は？」

俺のは本気なのか？

「ところで姫路。体は本当に大丈夫なんだな？」

「はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！残りの半分は！？」

「俺のはどうなんだ！？」

本気、もしくはこのまま無視ならまじでヤツてやる。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

おもわず大声を出してしまいパンパン、と教卓を叩いて先生が警告を発してきた。

「あ、すいませ——」

バキィッ バラバラバラ……

・・・“パンパン”だよな“バンバン”じゃなくて。軽くただけで粉々になるなんて。よくこれ教卓としてもってきたな。

「えゝ……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言い先生は教室から出て行った。

「あ、あはは……」

姫路が苦笑いをしていた。

明久をはっと、真剣な顔をしているな。試召戦争をする決意をしたんだろう。

「雄二、真也、ちょっといい？」

そら来たぜ。

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「俺もいいぜ」

雄二に続き俺も廊下に出る。

「んで、話って?」

「この教室についてなんだけど……」

この教室というのは言うまでもなくFクラスのことだろう。

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「雄二もそう思うよね?」

「もちろんだ」

「真也は?」

「俺もそう思う」

俺も同意する、ってか同意しなきゃおかしいだろ。

「Aクラスの設備は見た?」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

「あっちも違う意味で、『教室か、これ』って言いたくなるほどな」

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない?」

キタコレ。な気分だ。

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

おっと、雄二さん、探りを入れております。

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

学校生活を快適にということならありえるが、

「……姫路の為、か？」

だよねえ。

「ど、どうしてそれを!？」

「本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐに引つかかる」

あいかわらずポーカーフェイス向いてねえなあ。

「べ、別にそんな理由じゃ——」

まだ言ってる。

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

「だから、本当に違っつてば!」

「ふうん。なら姫路のことはなんとも想ってないと」

俺もカマかけしてみた。

「い、いや。別にそういう訳でも無いけど——」

「なら、姫路のこと想ってるんだよな」

「ぐう……」

本当に単純。まだ誤魔化せる言葉あるのに。

まあ、そこが、正直な、真っ直ぐな所がいい所でもあるけどな。

「まあいい。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

「え?どうして?雄二だって全然勉強なんてしてないよね?」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みてたくてな」

「????」

そういえば俺も、どうして雄二がこんな風に思っているのか、よく知らないんだよな。

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし——おっと、先生が

戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

「おう」

雄二に促され、俺たちは教室に戻った。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

教卓、替えた？最初と一緒にくらいボロい。

「えー、須川亮です。趣味は――」

さて、いよいよか。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

そう言い、雄二は教壇に上がった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

さすがだな。みんなに注目されていても堂々としている。

「さて、皆に一つ聞きたい」

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

Fクラスは精一杯の声で叫んだ。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を

要求する！」

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる
』！』

今までであがらなかったが次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

そしていかにも何か企んでいるような顔をし

「これは代表としての提案だが――」

はつきりと

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

そう告げた。

さて、戦争の結末、どうしようかな。

3話・・・ようやくひと段落？（後書き）

オリ主の召喚獣の設定などはもう少し後で。

4話・・・これからどうしよう(前書き)

相変わらずの不定期&中途半端さ、ってこういうのばかり書いてる。前書き、後書きにキャラ出して会話でもしよっかな。

4話・・・これからどうしよう

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

様々な反対や批判の声（一部は姫路へのラブコール）があがった。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

それを雄二はものともせず言い切った。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

確かに今の段階では皆乗り気ではないだろうな。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

だが、雄二はここから説得をして士気を上げてく。

「それを今から説明してやる」

そうして周りを見渡す雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

ムツツリーニ…話の最中に覗くなよ。油断もすきもないやつだな。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者『ムツツリーニ』だ」

「……………！！（ブンブン）」

いまだに隠そうとしてるよ。みんな知ってるのに何で認めないんだろっ？まあ、だからこそ『ムツツリーニ』か。

『ムツツリーニだと……………？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしてるぞ……………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

ある意味同意だ。見習いたくないけど。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かに。皆さんご存知姫路は霧島に並ぶ学力の持ち主だ。さすが、恋する乙女と言ったところか。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

おーい、こんな時に口説くなあ。

「木下秀吉だっている」

秀吉は、戦力よりも作戦行動の方で期待できるからな。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

雄二も、作戦やら何やらで力を出す、いわば策士、戦争風に言っと軍師だからな。勉強ができない訳ではないだろうが。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

さすがだ、早くもここまで士気を上げるとは。

「それに、吉井明久だっている」

……シン――

…さすがだ、一瞬でここまで士気を下げるとは。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

雄二の事だ、おそらくネタだろう。

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

お前らはさっきあった自己紹介も忘れるほどの頭なのか？

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二た

ちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを——つて、なんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

睨んだ雄二だが、その後によりと笑つて、

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

その名を言った。

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよっ！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

今ほど『お前が言つな』という言葉が似合う場面はそうそうないだろう。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首をかしげそう聞いた。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそいつた類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

まあ、姫路には縁のない話だろう。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

キラキラした目で言う姫路。純粹だなあ。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

手を振って否定する明久。

まあ、例のフィードバックがあるしな。

『おいおい。『観察処分者』ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

クラスの奴らがそれを指摘する。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

ひでえ。

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

でも、雄二にそんな思いやりはないらしく話を進めた。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

…明久ドンマイ。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

姫路も雰囲気飲まれたのか小さく拳を作り掲げていた。やべ、ちよつとかわいいと思ってしまった。

…あれ、秀吉？どうして俺を睨むんだい？

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらふ。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」
さすがにその場のノリでは行かないよな。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

明久を死地に行かせようとする外道だと思っ。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

なら、明久のことをどう思っているんだろうか。聞いてみたい。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

…明久お前はやっぱり良い奴だな。後で労ってやるよ。

数分後

「騙されたあつ！」

物凄くぼろぼろになって帰ってきた。

「やはりそうきたか」

平然と言っなよ。

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

しかし、さすがに可哀相だな。

「明久、大丈夫か？」

「吉井君、大丈夫ですか？」

俺と姫路が、ほぼ同時に声をかけた。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

学校内の暴力でかすり傷ができるのって、大丈夫の内に入るのかな？

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

島田も心配し^{テレ}t...

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

…島田、そのツンは好感度を下げただけだぞ。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

おい、発端をつくった張本人。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

「大変じゃったの」

そう言ってみんな雄二の後を追うように教室から出て行った。

「……………（サスサス）」

「ちなみにムツツリーニ、畳の跡ならもう消えてるぞ」

「……………！！（ブンブン）」

よくここまで否定できるよな。

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから」

明久にも指摘されてる。

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う」

「ああ、さすがムツツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

「——何色だった？」

「みずいろ」

即答か。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………！！（ブンブン）」

…ホント、よくここまで否定できるよな。

「ほら吉井。アンタも来るの」

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

母親と捻くれた子供みたいな会話だな。

「……………一度、Das Brechen——ええと、日本語だと……………」

「……………調教」

近くからムツツリーニの声。というか、なに当たり前みたいに答え

てんだよ。

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間としてZuchthausung——」

「……………それはわからない」

「確か、日本語だと折檻だったかな？」

「それ悪化してるよね」

「そう？」

島田、お前はいったいどんな環境で育ったんだ？

「というかムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知ってるの？」

「……………一般教養」

なにが楽しくてドイツ語の『調教』なんて一般教養で学ばなきゃいかんのだ。

「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけズバ抜けてるね」

「……………！！（ブンブン）」

『調教』を性の知識として捕らえて良いのか？

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。

4話・・・これからどうしよう(後書き)

では、また次回に。お会いしましょう。

5話・・・俺の戦い（執筆）はここからだ（前書き）

遅れて申し訳ありませんでしたあ！今回は学校帰りで疲れましたので、キャラとの会話はまた今度

5話・・・俺の戦い（執筆）はここからだ

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

俺達は屋上で試召戦争の話を始めた。

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうだな。明久、なんか食えるものは持って来てるか？」

「・・・・・・・・」

持って来てないな、この反応は。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いた風に言う。

「いや。一応食べてるよ」

「…………あれは食べていると言えるのか？」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのさ」

「いや、何かも何も・・・」

「お前の主食って——水と塩だろう？」

俺は呆れ、雄二の哀れむような声。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

明久、反論にすらなっていないぞ。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「塩水と砂糖水なら飲む、だけどな」

みんなの優しさを受けて、ますますへこむ明久君。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「お前、仕送り何万もらってたっけ？」

確か、普通に生活してもゲームソフト1、2個買えたと思ったが。

はあ、しょうがないな。

「だったら、俺が弁当作ってきてやんよ」

「「「！」「」」」

「ゑ？」

「…それに俺はどう返せばいいんだ？」

と言うか、今約3名ほど目を見開いたような。姫路とか島田とか秀吉とか・・・で何で秀吉も！？

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

…本当にこいつ、どうして生きていられるんだろう。

「ああ、今日すでに色々あったからな。それでご褒美とか。まあ、色々だ」

姫路の料理のフラグ潰しとか。

「あ、あの、私も良かったらお弁当作ってきましようか？」

「「ゑ？」」

…なん、だと。

で、俺も明久みたいになっちゃった！

何故に！？Why！？明久に食べてもらいたいと言うのか！？対抗心燃やしまくり！？

つと、冷静になれ。姫路には悪いが、リーサルウェポンを食べることなんて無理。よって断ろう。

「神上君も。私も作ってきますから。1人より2人の方がいっぱい持ってこれますからね」

俺への配慮もあり！？くそ。だ、だがやはりここは断ろう。

「ああ…姫路、作ってきてくれるのはありがたいが、遠りyもが姫路さんも作ってきてくれるの！すごく嬉しいよ！！ぜひお願い！もが—————！！（こら—————！！）」

明久、貴様！！何ということをして！！ふ、だがまだ被害は明久のみ

「……ふーん。瑞希。それって吉井だけに作ってくるの」

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

島田—————！！お前ええええええ！！何て奴だ。鬼、悪魔、人でなし！

くそ！！みんなの反応は？

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「……お手並み拝見ね」

「わしも料理ができたらのう。真也に……」

「それじゃ、皆に作ってきますね」

駄目だ！！原作と一緒に（秀吉は何故か下を向いて）によこによこ

ている)になつてしまつた。

く、しかたない。食べて姫路にちゃんと真実を伝えるか。たとえ傷つけても、その方が本人の為だ。と言うか食べ続けたくないしな。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……」

明久に褒められ赤くなる姫路。

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」——にしたいと思つてました」

おまわりさん。ここにド変態がいまゝす。というか弁当雄二の言うとおりなしになればよかったのに。ないだろうけど。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

それ絶対褒めてないよな。

「だって……お弁当が……」

どんだけ食つてないんだよ。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろっ」

本当にかなり逸れたな。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろつし、勝負に出るならAクラスじゃろつ？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

「考えて？」

俺も会話に参加する。

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「ああ。確かに」

俺はなるほど、といった態度をとる。

「でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「明久、ちよつとは考える。今のメンバーを見てみる」

「えーつと……」

辺りを見渡して

「美少女2人と馬鹿が2人と異常者が1人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!?!雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポッ)」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない
!」

原作通りだな、そして

「明久?異常者って誰だ?」

新しく出てきたのは俺しかないよな?

「な、なんでもないよ」

「まったく、次ぎ言ったら弁当なしだな」

「誠に申し訳ありませんでした」

早!しかも土下座!?

「まあまあ。落ち着くのじゃ、真也に代表にムツツリーニ」

俺は落ち着いてるぜ。

「そ、そうだな」

え、雄二?今のマジだったの?

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミ入れたいんだけど」

確かに。が、

「ま、要するにだ」

いつも通り無視で話を進める我等が代表。

「姫路と真也の問題がない以上、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

まあ、俺たちだけでDクラスほぼ全員に勝ては、さすがに無理だな。そんな力押しでは。

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

つまり、今Aクラス打倒は無理か。

「あ、あの！」

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……神上君と吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

と大声で遮る明久。恥ずかしがらなくてもいいのに。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

と言って笑う雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

ふ、言うじゃねえか。

「いいぜ。お前に従おうじゃねえか」

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

さあ、戦争開始だ！

5話・・・俺の戦い（執筆）はここからだ（後書き）

がんばって二次創作していきます。

6話・直接剣もってバトルするものいいけどこんなバトルもしたいと思うのは

今回タイとル長いなあ。

「本当にな」

おや真也君。こんにちは。

「ああ、本当に前書きに出したんだな」

まあね。

「で、今回は戦争の話か？」

うん、そうなんだけどね。

「…なんかあるのか？」

色々。とりあえずどうぞ。

「キャラ出した割りに短いな」

…眠いんだもん。

「こいつ、最低だ！」

6話・直接剣もってバトルするものいいけどこんなバトルもしたいと思うのは

よっしゃ！戦争だ！暴れるぜ！
と行きたいんだが、

「先生、次頼む」

「先生、次お願いします」

ただいま、姫路と回復試験の真っ最中。
くそ、放送の所とか俺も居たかったんだがなあ。まあ、しかたない
か。外の様子は、

「さあ来い！ この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終
戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる
頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生
徒に仕立て上げてやるっ」

「お、鬼だ！誰か、助けっ——イヤァァ——（ボタン、ガチャ）」

容赦ない地獄が繰り広げられていた。っていうか鉄人？それって「

洗脳』って言うんじゃない？

「先生、次をお願いします」

おっと、少しぼくっとしてしまったな。俺も続けるか。

『全員突撃しろーっ！』

…明久…狙ったのか？よし、テストやるかと思った瞬間叫びやがって。その場面思い出して思わず吹いちゃうところだったじゃねえーか。…まあいいや。さて続きを…

『ちよっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！』

『嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！』

『来ないで！私は普通に男が好きなの！』

『嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！』

『このわからずや！』

…お前らは揃って！俺にテストをやらせないつもりか！？後島田、同情するぜ。清水の勘違いも迷惑はなはだしいな。また本編進んだらどうにかしといたほうがいいかな？…できるかな？

（まあ、それは後で考えるか）

そうして俺は、ようやくテストができてきた。

ピンポンパンポーン
連絡致します

来たか…

船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています

「…く」

俺は腹を抱えて笑いをこらえている。

生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです

「・く…くく」

「あれ、神上君。大丈夫ですか？」

姫路が心配したのか聞いてきた。俺はそれに首だけを縦に動かして返事をした。

やべえ、生で聞くとマジで笑える。

『須川 ああああああっ！』

この声を合図に俺は大爆笑してしまった。…姫路や先生がこっちを見ているのはまた余談である。

そしてまた時間が過ぎ、

ガシャアアン！

『うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！』

…やったな、明久。島田よ、お前は今男子の好感度が下がり、女子の好感度が上がった。

…ドンマイ。

そして明久、お前の待つ未来は絶望だ。まあ自業自得だが。でも、骨は拾ってやる。

『島田さん、キミはなんてことを！』

…見捨ててもいい気がしてきた。

「さて、それでは私はもう行きますね」

「ああ。お疲れさん」

そして姫路は戦争に行った。もうこんな時間か。結構点数稼げたし、俺も終わるか。

「んじゃ、先生、俺も行くわ」

「はい。お疲れ様でした、神上君」

そして俺も戦場に行くと、

『うおおーっ！』

Fクラスの勝利で終わっていた。

…俺、今回何もしてないじゃん。

6話・直接剣もってバトルするものいいけどこんなバトルもしたいと思うのは

.....

「...この話、いたか？」

言うな！！自分でもなんだこれって思ったよ！でも跳ばせないだろ！話跳ばす訳には行かないだろ！

「わ、わかったよ」

待ってくれていたみなさんには申し訳ないです。

「こんな作者ですが、見放してやらないでください」

ありがとう、真也。

「ところで話は変わるけど」

なに？

「他に何か二次創作しないのか？」

ああ、一様考えてる。

「どんなのだ？」

ええっと。...前書き、後書きのバランス悪くなるから、次回の前書きか後書きに書くわ。

「後書きで次回に続くみたいなことすんなあ!!」

7話・・・勝利の握手とか胸上げってしたことある？俺はない……あ、田陣はした二
ふう。

「どうした？」

いや、今回結構書いたなって。

「まあ、元あるし、そんなに時間掛かんかったろ？」

失礼な。元あっても結構掛かるよ。

「そうかい」

でも、こんかいオリジナル場面が多かった。

「そうなんだ」

ではどうぞ。お楽しみください。

「…他の小説書くって話は？」

・・・後書きで。

「結局後書きかい！」

7話・勝利の握手とか胴上げしてたことある？俺はない…あ、円陣はした

「凄いよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています」

勝利した途端色んな所から賛美の声が上がった。…うん間違っ
てないよな。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつか」

照れてんなあ、ギャップというやつですな。男の见てもキモイ
だけど。(雄二限定で)反応するのは霧島だけか。

「雄二！」

「ん？ 明久か」

「僕も雄二と握手を！」

雄二の前に明久（復讐鬼）登場。

ガシッ

「雄二……！ どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！ フンッ！」

「ぐあっ！」

ガシャン！

…どこから包丁が？全くわからなかったぞ？

「……………」

「……………」

当然ながら無言の二人。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……………」

明久が喋るが雄二は無言のまま。

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ!」

「おーい。誰かペンチを持ってきてくれ!」

誰がそんな物持つてるんだよ。いや、学校側にはあるだろうが。

「す、ストップ! 僕が悪かった!」

「……チツ」

舌打ちをして解放する雄二。明久の復讐はこうして終わった。

「……生爪……」

小声で言うな、怖いわ。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

…あ。この二人のせいですっかり忘れてた。

「あ、その、さっきはすいません……」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

まあ、騙し討ちっぽかったのは認めるがな。これも作戦だ。って何もやってない俺は言えないが。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

明久が雄二に聞くが

「いや、その必要はない」

と、雄二は否定した。

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

まあ、本来雄二は設備自体どうでもいいからな。

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

まあ、どうせならAクラスを、と言ったところか。

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

…こいつは、質問ばかりして。屋上でも少しは話をしただろうが。

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

…明久、そういつている時点で少し認めてるぞ。

「おっとすまない。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

あります。ツインテールの女の子に。ちなみにそんな時俺もいた。その話はまた今度。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

そりゃそうだ。じゃなきゃ戦った意味がない。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

ま、このままクラスに恨まれるより、ましかな。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

あの、外道を倒す為にな。

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな」

正直に言いやがって。まあいいか。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながらFクラスへと向かい始めた。ほんと、代表っぽいなあ。

「真也、雄二。僕らも帰ろうか」

「そうだな」

と、帰ろうとしたが。

「あ、あのっ、坂本君っ」

「ん？」

姫路が呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

ああ、あの話か。

「おう。わかった」

雄二はOKして姫路についていった。明久は…何してんの的な動きをしている。まるで自分の中に悪魔しかいなかった様な動きだ。

「ま、元々興味があつたが、きつかけはコイツがそんな相談をしてきたってコトだ」

お、話も終わりかな。

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って……」

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってコトだろ？」

「…あの、それじゃあ神上君はどうして？」

「さあな。あいつは何故かは知らんが、まあ後で聞いてみればいい」
うん？今俺の名前が出たような。

「さて真也、明久。そろそろ帰るぞ」

「ん？あ、ああ」

考えてたら何時の間にか雄二がそばまで来ていた。

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ、今のところはな」

？どうしてだろう。俺がいるから新たな問題発生か？まあ、大丈夫だよな。

「ふーん、そつか。よくわからないけど、それじゃ帰ろうか。姫路さん、またね」

「じゃあな。姫路」

「あ、はい！ さようなら！」

こうして俺たちは帰路についた。

途中明久は何か怒った顔をしていた。まるで天使も悪魔と同じだったような顔だ。

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？ 別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

明久が思い出したように雄二に質問した。

「ああ、そのことか。理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとかな」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないだろう？ そうならない為と、不満によるモチベーションを維持する為だ」

本当に、すさまじい策士っぷりだな。

「だが、設備を奪わなかったことを不満に思う奴らもでてくるぜ」

俺も会話に参加した。この事は結構疑問に思っていた。

「ああ。そうかもな。だが、Aクラスを取る、と最初に目標を立てたからな。みんな、その事を少しは意識はしているだろうからな」

…抜け目なしってやつか。ほんと、たいした奴だな。

「Aクラスに勝てるかな？」

明久が不安な声を出した。

「無論だ。俺に任せておけ」

だが、雄二の力強い安心できる声で答えた。

「……ありがとう。僕のわがままの為に」

「別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

ふと雄二が遠くを見る。…こいつはこいつで過去に何かあったんだろうな。

「目的の為に、明久にだってきっちり協力してもらうからな。とりあえずは明日の補給テストで」

「……ぐう」

「お前、忘れてたな？」

たく、しょうがない奴だな。

「ゲームばかりしてないで、寝る前に少くらい勉強もしておけよ」

「はいはい。教科書くらいは読んで……ん？」

「どうした？」

何か鞆を漁ってるが、

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

やっぱりか。

「……あほ。さっさと取って来い」

「うう……。んじゃ、先に帰っていいよ」

「もちろんだ。待ってるわけがないだろう」

「わかっていたけど、薄情もの」

たく、こいつは。…てしまった。

「明久俺も行く。筆箱忘れちまった」

「なんだ、真也もか。明久並だな」

「おい。こいつは教科書自体忘れて、しかも軽いことに疑問を持た

なかつたんだぞ」

同じにするな。

「…そうだな。悪かった真也」

「わかってもらえたらいいんだ」

頭を下げ謝った雄二を、俺は許した。

「二人なんか嫌いだ!!」

あつ、走って行っちゃった。しゃあない。俺も走って追つか。

「たっだいまー」

「ようし。じゃあ、お前これからここに住め」

「じよ、冗談だよ」

と、馬鹿なことをしていると

「か、神上君、吉井君!？」

「あれ？ 姫路さん？」

「姫路？」

姫路の声が上がった。しまった、ここはラブレターのフラグだったな。

「どどどどしたんですか？」

「ああ、ちょっと忘れ物をな」

そうして、姫路の卓袱台の上には例のラブレターがあった。

「あ、あのっ、これはっ」

見られて慌てているせいで言葉が出てこないみたいだ。

「これはですね、そのっ」

「うんうん。わかってる。大丈夫だよ」

いや、絶対わかっていないよ、お前は。

「えっと——ふあっ」

あなたのことが好きです

姫路がこけて紙がこっちに來たせいで、手紙が丸分かりになっ
てしまった。

「……………」

明久は手紙を手に取り姫路に差し出した。

「変わった不幸の手紙だね」

「お前認めない気だろ」

ほら、やっぱり。

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

そらそうだ。

「そんなことをしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。ああ大丈夫。スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくるから」

「お前、何する気だよ」

てか誰だ山下って。

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ！それは不幸の手紙だ！実際に僕はこんなにも不幸な気分になっっているじゃないか！」

「ええい、やかましい！おとなしくしてろ！！」

「ぐっふう！！」

いい加減鬱陶しくなったので、鳩尾に一発食らわしてやった。

「悪いな、姫路」

いろんな意味で。

「あ、い、いえ。その吉井君は…」

「ああ、こいつなら大丈夫」

こんなん日常茶飯事だからな。

「じゃあな。邪魔したな」

と出て行こうとしたが、

「あ、待ってください!」

姫路に強く呼び止められてしまった。

「ん、どうした?」

こいつなら平気なんだが。

「あ、あの、神上君はどうしてこの戦争をしようと思ったんですか?」

え、俺の話なの? 明久じゃなくて。あ、明久は雄二から聞いたな。
…まあいいか。

「色々理由はあるけど、まあ面白そうだったし。それに…」

そうして俺は姫路に真っ直ぐ向き

「バカな親友が良いバカをやろうとしてるんだ。協力すんのは当然

だろ」

俺は笑顔で言い切った。

「……」

恥ずかしいけど姫路もちゃんと聞いてくれた。

「それに、体が強くない奴もいるんだ。何とかしたいと思うもの当然だろ」

「え……それって／＼／」

あ、赤くなってる。俺も結構恥ずい／＼

「んじゃ。そういうことで。あ、そうそう」

俺はもう一回姫路に振り向き

「その手紙、うまくいくといいな」

俺が応援すると

「あ……はい！」

いい笑顔で返事をした。

ま、このくらいはいいだろ。

ちなみに明久は学校を出た瞬間目覚めた。ちゃんと忘れ物は取った。

7話・・・勝利の握手とか胸上げってしたことある？俺はない・・・あ、円陣はした

「さあ、で、どうすんだ？」

おう、考えてきたぜ。

「...考えてなかったのか？」

・・・ソ、ソンナコトナイデスヨ。

「ふうん。まあいいや。でどんなのがあるんだ」

おう。まずは定番、『リリカルなのは』

「ほう。確かに定番だな。結構アイディアでるし」

そうなんだけど、

「？なんかあんの？」

いや、俺結構原作大雑把にしか覚えてないんだ。話の流れとかしか。

「なんだそれ。細かいところは他の作品見て補わさせてもらえばいいじゃん」

いや、覚えてないのは主にStrikersのナンバーズのキャラ。

「...ああ。なるほど。確かにあれは覚えてなきゃ苦しいな」

オリジナルもできないじゃん。

「高望みすんなって」

ひどー！！

「で他は？」

スルーですか。他は『東方』かな。

「これも定番か」

これは、スペカと話の順番がわかんない。

「…お前本当にダメダメだな」

・・・くすん。

「まだあんのか？」

うん、『ファイアーエムブレム』新・紋章の謎』

「なぜ！？」

夏休み買ってやったから。それにFファイアーEエムブレム好きだし。これ恋愛あつたし。

「そこかい！」

後は聖剣伝説3 .

「だからなんで！？しかも古！」

失礼だな。まだまだ需要あるよ。同人であつたし。

「・・・ええ（引き）」

待つて！別にえっちいのじゃないよ！いや、えっちいのもあつたけど！買ってないよ！見てないよ！

「・・・そこまで否定すると逆に怪しいな」

誤解だ！

「まあいいや。他には？」

クロス物で『リリカルなのは』と『バカテス』。

「定番だけど、バカテスもう書いてるじゃん。今まさに」

うん、だから

1、新しく書きなおす

2、これはこれで取っというて書く

3、どっちも書く

4、書かない
になる。

「ってか、いずれにしても書くのか」

設定とかは結構考えてる。

「そうなんだ」

ああ、新しい要素を加えて妄^s…考えると楽しいしな。

「妄想つて言おうとしたぞ、こいつ！」

まあ、書くかは考え中。複数書くと手付かずになっちゃいそうだし。

「だろうな。まあお前はそんなもんだよ」

ひどい！でも否定できない。

まあ読んでくれる人が何か書いてきたら検討する。なかったら気分で書きはじめる。

「読者だより。しかも何様って感じだな、おい」

ダメダメ作者でごめんなさい。

「てかお前、まさか最初っからそのつもりでクロスのやつ番号書いたのか？」

いや、番号は関係なし。

「あつそ」

冷たい。でも、もしクロスで、この中からこれでっと思ってくれたら書いてくれたらっと思ってってる。一から書くの面倒だけど。

「やっぱ最低だ、こいつ。まあ、よかつたらなに書いてください」

よろしくお願いします。

「そういえば前回の後書きで『バランスが』って言ってなかったっけ？」

ああ。他の作者さんも長い人は長いし別に良いやって思って。

「こいつ・・・」

8話・学生のお昼はデシジョン上がる（前書き）

おそくなりましたー！

「まっ たくな」

うう、一週間に一回は投稿って思ってるのに。

「いや、だいぶ遅れたときあったぞ」

わかってるよ。あくまでそういう気持ちでってこと。

「あつそ」

相変わらず冷たいね。

「遅れた原因は？」

ゲーム。

「死ね！」

ぐふう！い、いや真つ当な理由もあるんだよ。

「なんだよ」

大学のAO入試とか願書とか色々。

「そうか。ってお前！じゃあこれからもっと遅くなるじゃねえか！」

い、いや大丈夫だ。そんなに忙しくはならない。

「そうか。それならいいが」

とにかくこれからがんばって書くのでよろしくお願いします。

「では、どうぞ」

8話・学生のお昼はテンション上がる

翌朝、いつも通り学校に向かう。本来ならDクラスなのだが交換しなかったからな。

「おはよう」

「おう。真也」

雄二が挨拶を返してきた。そして英語の教科書を開いていた。

「今日は晴れだよな？」

「おい、真也。どうゆう意味だ」

「冗談だよ。回復試験のためだろ？」

「ああ。そうだ」

ま、俺は昨日受けたばっかでそんなに関係ないがな。

…さて、みんな受けるんだよな、テスト。俺も受けるのか？ だったら昨日受けた意味ないじゃないか！

「おはよー！」

そうこう悩んでいると明久が来た。

「おう。おはよう」

「真也。おはよう」

「おう明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二」

俺たちは挨拶を交わした。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備のことだろ」

やはり明久も疑問に思っていたみたいだ。

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

「ふーん」

さすがと言うか。不満に思った奴らも出てきたけど説得したのか。

「それよりお前はいいのか？」

今度は雄二が明久に聞いた。

「何が？」

「昨日の後始末だ」

…ああ。昨日の色々やったことか。あ、明久がなんか雄二に殺気飛ばしてる。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされるとわかっていながら行動するなんてありえないよ」

とんでもないこと思い出したな、こいつ。

「いや、俺の始末じゃなくて」

今で察した雄二すげえ。

「一体何が言いたい——」

いまだにわかっていない明久に——

「吉井っ！」

「いぶあっ…！」

島田の鉄拳が飛んだ。…いや、飛んだのは明久か。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

ずいぶんご立腹されてるなあ。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね……！」

まあ、そんなことされたら誰しも怒るわな。

「おかげで彼女にたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！」

…これは『彼女にたくない女子ランキング』があることにつつこむべきか、それとも『今もしているのか』とつつこむべきか。

「——と、本来は掴みかかっているんだけど」

殴り飛ばしたのにまた掴みかかるつもりだったのか？

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

ああ、そういえば明久にはもう一つあったな。

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

島田、いい笑顔だぜ。

「ん？ それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど」

島田は、明久に――

「監督の先生、船越先生だって」

最大の恐怖の名を告げた。

「明久、速いけど走ってもどうせ教室で会う羽目になるんだから無駄だぞ」

聞こてえないだろうけど。

「ふん！」

あゝあ、ホントだいぶ怒ってるな。でも、

「島田、確かにあいつにも非はあるけど少しぐらい優しくしないと振り向いてくんねーぞ」

「なっ！ななな、何言ってるのよ！？」

「さて、なんだろなあ」

そういつて俺は席に着いた。

え、船越先生？知つてのとおり、近所のお兄さん（三十九歳／独身……お兄さん？）を紹介（生贄）してあげたみたいだよ。

「うあー……づがれだー」

「だろうな」

朝から走ってその後四教科テスト受けたし。俺？残念ながら俺もテ

スト受けたよ畜生！

「うむ。疲れたのう」

秀吉が髪をポニーテールにしてやって来た。何故にポニテ？

「……………（コクコク）」

ムツッリーニも疲れたらしく、首を縦に振っている。

「真也もお疲れじゃ」

「ああ、お疲れ。てか何でポニテにしてるんだ？」

「う、うむ。こっちの方が勉強するのに良いかと思ってな。に、似合うかのう？」

何故、頬を赤らめて聞く？

「ああ、似合ってるぜ」

「そ、そうか！そ、それじゃあ、ずっとこうしていようかのう」

え、何これ？どうゆうことこれ？ポニテフラグですか？似合ってると思ってくれるからずっとこうしていてあげるってやつ？友達思いだなあ。だが俺にはあの神様みたいな少女と一緒にいる一般人みたいなポニーテール萌ではない。

「ああ、やめとけ。別に俺はそういつつもりで言っただけじゃないし。お前も楽なのがいいだろ？」

「う、うむ。そうじゃな（わしのことを思ってたのじゃろつか）」

さて、昼だし飯食うか。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と妙飯とカレーにすっかな」

炭水化物ばっか、どんな胃してんだよ。明久とは真逆の意味で聞きたい。

「あ、あの。皆さん……」

…俺は何も聞こえない。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

明久！こんな時だけ敏感に反応しやがって！

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じやなかったらどうぞっ」

「迷惑なもんか！ ね、真也！雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「あ、ああ」

「そうですか？ 良かったあ」

食べるの確定か。く、腹をくくるか、飯だけに。

8話・学生のお昼はデنشヨン上がる（後書き）

うん。

「どうした？」

やっぱり中途半端かなあ。

「そうだろうな」

でも区切りがいいところってここぐらいなんだよなあ。

「飯のとも書けばよかったじゃないか」

力尽きた。

「おい！」

おやすみ。

「お前本当に自由なやつだな！」

9話・・言わないで後で傷つくなら今言って正すべき(前書き)

イヤッホウー！

「なんだよ、うるさいなあ」

初めての原作ブレイクだぜい！

「そうだな」

岡・・サイコ〜〜！

「そこでネタすんな！」

テストも終わったし書けたし嬉しいな！

「テストだったんだ。では？」

∴いつもよりは書けた
はず。

「一気にテンション下がったな」

明るく行こうぜ！ではどうぞ

9話・・言わないで後で傷つくなら今言って正すべき

…来てしまったぜ。地獄の門へと（本当は屋上）雄二と島田は飲み
ものの買出しに行ってる。…俺もその名目で逃げればよかったかな。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

「あ、シートもあるんですよ」

「気持ちいいね！」

「……………（コクリ）」

ああ、平和だなあ。いつまでもこの平和な時間が続——

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

——くわけないよね。わかってたよ。

『おおっ！』

みんなが歓声を上げる。うん、うまそうだ。…うん、うまそうだな。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に——」

「……………（ヒョイ）」

「なっ！ムッツリーニ！」

こいつ！エビフライを一気に口に入れて――

ボタン

ガタガタガタガタ

顔面から地面に豪快に倒れた。

「……………」

「……………」

「……………」

みんな、絶句する。まあ、そりゃそうだな。

「わわっ、土屋君！？」

姫路だけがこの状況を飲み込めずにいた。

「……………（ムクリ）」

ムッツリーニは起き上がり、

「……………（グッ）」

姫路に向かって親指を立てた。いつもどおりの無表情だ。…足は尋常じゃないぐらいがくくしてるけど。

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ」

…姫路は天々…純粹だなあ。でも、気づこうよ。足とか、倒れた事とか。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

こちらを向いて笑顔で勧めて（死刑宣告）くれる姫路。

（……真也、秀吉。あれ、どう思う？）

明久もこの非常事態に気が付き小声で言ってきた。

（……どう考えても演技には見えん）

（ていうか演技する意味ないだろ）

（だよね。ヤバイよね）

俺たちも小声で返し、話し合いをした。

（真也、明久。お主等、身体は頑丈か？）

（正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）

（俺は普通だ）

さすがに胃を強くするよう頼んでないからな。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう）

（そんな、危ないよ！）

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ）

毒を食っても大丈夫って、それ胃の問題だけじゃない気がする。

（いや、俺が行く）

とここで俺のターンだ。

（真也！？）

（な、何を言うのじゃ！？）

二人は反対した。

（食べて真実を伝える）

（そんな！？そんな事したら姫路さんが傷つくよ！？）

確かに、だが――

（遅かれ早かれだ。後で言ったら『あの時庇われたんだ』って思っ

て自分を責めるぞ)

姫路のことだ。どっちにしても自分を責めるだろう。なら今言っ
て直させた方がためになるだろう。

(それじゃ、イッてくる)

(真也…)

(すまぬ。真也)

(なに、気にすんな。俺が自分の意思でイクんだから)

そう言って姫路に向き合う。

「俺もいただくよ」

「あ、は、はい！どうぞ！」

なんで姫路が緊張してるんだよ。

「んじゃ、いただきます」

そう言っただけ俺もエビフライを口に入れた。

うん。衣がガリガリしてエビがグチュグチュしていて香ばしさを超
えた辛味と鼻に突き抜ける酸味がすごく――

「ぐふあー！」

——すごく、やばいです。

「か、神上君！？どうしました」

ぐ、耐える俺。気をしっかり持て。まだ、眠っちゃ駄目だ！

「ひ、姫路、単刀直入に聞く、何か入れたか？」

「あ、はい。冷めてもおいしく食べれたり、味を引き立てるために少々」

「…何を、入れた？」

「塩。化カル。ウムに水。化ナ。トリウム、硫。化ナ。トリウムに、銀を少々」

あれ、おかしいな。所々聞こえなかったよ。うん、色々おかしいものが聞こえたけど気のせいだな。

明久と秀吉を見ると震えていた。どうやら気のせいではないらしい。

「姫路、料理に科学用品なんか入れんな」

俺はついに言ってしまった。

「ええ！？で、でも、ちゃんと中和したから問題ないはずです！」

「いや、人体に問題なくても味に問題がある」

「そ、そんな…」

そう言って一口食べた。

「~~~~!!!!」

うん、やはり不味かったのか悶えてる。

「わかったか。姫路」

「はい」

…すっげえ落ち込んでる。罪悪感が半端ない。
フォローしとくか。

「今度はちゃんと作ってきてくれよ」

「え？」

どうして？みたいな顔をしてきた。
だって――

「だって見た目はうまそうなんだから、ちゃんとした調味料使って
作ってきたら絶対うまいに決まってる」

そういつて姫路の頭に手を置き

「今度は期待してるよ」

撫でながら、安心できるように笑顔で言った。

「…はい！」

ふう。一応元気が出たな。よかったよかった。
でも、

「……………」

約二名が微妙な顔で睨んでいる。よかったなあ感と嫉妬感がばりばり出てる。てか、なんで秀吉まで？

「んじゃ、俺も弁当持ってきたし、みんなで食うか」

この後、雄二や島田も入れてみんなで弁当を食べた。

余談だが雄二が姫路の弁当を食った。こういう世界ってすごいね。ホントに目を見たら何て言いたいかわかつちゃうから。『毒を盛ったな』って。

それを見た姫路がまた落ち込んだからとりあえず雄二をばこつとした。

9話・・言わないで後で傷つくなら今言って正すべき(後書き)

今回はお昼オンリーでした。

「まあ、もう少し書こうぜ。話が少し切れすぎだぞ」

そうだな。うん、がんばる。

「そう言えば他の小説書く気になったか」

まだ。色々考えれてはいるんだけど、踏ん切りがつかないっていうか、ちゃんと書けるかなあって。

「あそ」

聞いてきたのにその反応は冷たすぎる！

「結局するのはお前なんだ。最終的にお前が自分から決めるしかないんだよ」

…そりゃあ、な。うん、ちゃんと考えてするよ。

「ああ」

そんじゃ、今回はここまで。

「それでは、また」

10話・・・10話で此処って…Orz（前書き）

パソコンが新しくなった！

「ほう。買いかえたのか？」

いや、親父が知り合いから「新しいの買ったからやる」と言っ
て安く売ってもらったんだ。

「で、それをお前が使ってる」と

YES！

「うん」

これでパソコンが途中で消えたり止まったりしなくなる！

「よかったな」

うん。でも…

「？どうした」

いやね、また設定とか、インストールしたものとか、色々やり直さ
なくちゃいけないからさ。それがちょっと。

「ああ。がんばれ」

がんばる！それでは、どうぞ。

10話・・・10話で此処って…orz

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

あれからみんな満腹の状態で（雄二も回復した）次の試召戦争についでの話をしていた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

そつ、今回はあの屑が代表をしているBクラスである。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう」

明久のもつとも言える問いに、雄二が急に神妙な面持ちになり、

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

あの雄二が、戦う前からこんなセリフを言う。まあ無理もない。あの霧島翔子を代表としてはじめ、学年次席である久保利光、秀吉の姉、木下優子にあの工藤愛子とずばぬけた学力を持っているやつが何人もいる。こいつ等を抜きにしてもFクラスで太刀打ちできるわ

けない、というのが現実。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

さすが。それでも諦めず打倒Aクラスの目標にしている。これも神童と言われている所以かな。

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

そこにまた明久が雄二に抗議した。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「そのためのBクラス、だろ？」

「そうだ」

俺の答えに雄二が肯定した。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

嘘つけ。

（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

姫路からの助け舟で答えを得た明久。てか、モロバレだぞ、姫路。

「設備のランクを落とされるんだよ」

今更感MAXなんだが…

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

それで済むのか？

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

「だからなんですぐにペンチに行くんだよ。そしてなぜムツツリーニに言うんだよ。持ってたのか？だとしたらすごいよ。なんで持ってたのって言いたくなるけどな。後明久、お前リアクション軽いな」

やばい、思わず長いことツツコンじまった。この一連の流れに隙が

なかったしな。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「またも姫路がフォローをする。」

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「Dクラスの時もそうだったろうが」

「こいつ、忘れたのか？」

「そうだ。そしてそのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

「明久の奴、ちゃんとわかったのか？…まあ、大丈夫、だよな？」

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに――」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？　こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

今までしゃべらなかつた秀吉が雄二に疑問をかけた。だが

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

自信満々に言う雄二。まあ雄二の奴、自分がやるつもりだからな。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

ということだ、この話は雄二の話術により終わりを迎えた。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」
またか。

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

…まあ、ごもつともな意見だ。色んな意味で。

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？」

出たよ、鬼畜ジャンケン。

「OK。乗った」

案の定、明久は乗ってしまった。単純な奴。

「よし。負けた方が行く、で良いな？」

雄二の言葉に、こくりとうなずいた。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい」

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

…ホント、単純な奴。

そうか。それなら俺は――」

雄二は指をゴキゴキと鳴らした。

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

わー、すごい心理戦だー（棒読み）

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（雄二）　グー（明久）

「決まりだ。行つて来い」

「絶対に嫌だ！」

そりゃそうだ。

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

どの口が言っただよ。

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

明久、なんて残念な子。

「でも、お前不細工だしな……」

雄二、それ自分が大丈夫って言った言葉も否定してるぞ。

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「くだらないこと言っでないと行け」

「三人なんて嫌いだ！」

そうして明久は、殴られに行った。

そういえばムツツリーニ一言も喋らなかったな。

「……言い訳を聞こうか」

言い訳も何もないと思う。

「予想通りだ」

「だから、さっさと言っなよ」

こいつの冷静さ、すげえなあ。

「くきいー！ 殺す！ 殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

鳩尾一発で黙らせるとは、さすがだ。

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

「お前がやったんだろうが」

さすがにあんまりだと思う。

「ほら、行くぞ」

そうして、明久を担ぎ帰った。

あれ？なんか忘れているような。…まいっか。

次の日。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

Dクラスとの戦いの時のこともあるのか士気が高かった。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

『うおおーっ！』

姫路が少し腰を引かして答え、その答えにまた士気が高まっていく。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響き、Bクラスとの戦いのゴングが鳴った。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

さて、俺もやるか！

10話・・・10話で此処って…Orz（後書き）

次回、Bクラス戦！

「俺どうすんの？」

とりあえず、あの屑の罾のところで活躍してもらおっかな。

「ようやく戦えられるのか」

さて、どうでしょうか。

「え、どうゆうことだ？」

色々考えようと思ってな。

「まさか、まだ考えてないのか？」

結構行きあたりばったりなんだ。俺。

「…そうだったな」

というかそろそろ召喚獣のこと書かなきゃ。

「そういえばまだたったな」

また近いうちに書くよ。ではまた次回。

PV3万、ユニーク5千前まできたことに初めて気がついたので番外編をまとめ
また遅れました！

「言いたいことは色々あるが今回遅れたのは？」

先週文化祭だった。

「…まあ、それはいいかな」

あとAO受かった！

「ほう。よかったじゃん。あとは、ちゃんと卒業したらいいな」

…できたらいいな。

「卒業まで危ないってお前…」

休みすぎで。

「自業自得だ」

厳しい！

「んで？今回のこれは何だ？」

いやあ。アクセス解析の累計書かれていた場所はじめて知って。

「お前馬鹿だろ！」

今までこんなに見てくれているなんて思ってたな。

「んで、今回番外編と言っ訳か」

うん。あと2つ書く。

「大丈夫か？」

何とかするさ。ちなみに時間軸は無視の方向で。

「なんじゃそりゃ！」

では、どうぞ。

PV3万、ユニーク5千前まできたことに初めて気がついたので番外編をまとめ

「ふう」

風呂から出て、時間はまだ9時ちょいか。まだ寝るには早いしどうしようか。

まもり〜たい、まもら〜れ〜てる、あえないと〜きもず〜う〜と、いちびよ〜ずつわた〜た〜ちは〜つよくなれ〜るから〜、

ん？携帯が鳴ってる。相手は、秀吉？

「もしもし？」

『も、もしもし、真也か？』

「ああ。どうした？こんな時間に」

『そ、そのじゃな…』

？どうしたんだろう？秀吉にしては齒切れが悪い。言い出しにくいことなのか？

『わ、わしと付き合ってくれ！』

・・・これは言い出しにくいな。うん。

「ああ、秀吉？そのだな、お前の気持ちは嬉しいんだが、いくらお前が女の子っぽいからって男に変わりはない訳だし。そういうのは

…」

色々と問題が…ねえ。

『え？…ああ！ち、違うぞ！そうではなくただ買い物に付き合っ
てほしただけであってじゃな！（まあ、そうなりたいとも思っている
が）』

うん、そんな事だろうと思った。だって急すぎるし。そんな俺に惚
れるってありえないし。最後のほうは聞こえなかったけど。
にしてもすごくベタだなこの展開。こんなので大丈夫か？

作（大丈夫だ。問題ない）

…今のは無視しよう。

「つまり、明日行く買い物に付き合っ
てほしいんだな？」

『う、うむ。そうじゃ』

「何買うんだ？」

『演劇用の化粧品や小道具じゃ』

なるほどな。

「わかった。付き合うよ。あ、他の奴らは？」

『い、いや、真也一人で大丈夫じゃ！』

「?そうか?わかった。じゃあ明日の10時に商店街の噴水の所で待ち合わせな」

アニメの3話にあったあの尻から水を出す変な噴水だ。待ち合わせ場所としてどうよ?という感じはあるが、まあわかりやすいからいいや。

『わ、わかった。ではまた明日。お、おやすみじゃ』

「ああ、おやすみ」

そう言つて携帯を切った。こうして友達と買い物に行くの久しぶりだな。よし、ゲームするのはほどほどにして、今日は少し早めに寝るか。

・・・そういえば俺着信音あんな歌にしてあつたっけ?

秀吉Side

誘ってしまった。こ、これはデ、デデ、デ、デート、なのか?いや、わしは男なのだ。デートになぞならんのはわかっておる。

(待て。女子のようにしたら、デートに見える。そ、そうじゃ!もしかしたらカップルでできる割引があるやもしれぬ。それを口実に、女子の恰好ができる!)

そうじゃ、これなら大丈夫じゃ!そうと決まれば明日の準備じゃ!・・・切る前の真也のおやすみ、録音すればよかったかの?

秀吉Side END

翌日

（うーん、少し早いかな？）

今俺は待ち合わせの場所に向かつてる。ただいまの時刻は9時40分。指定時間の20分前である。まあそれだけ楽しみなのかもしれないな。

そして待ち合わせ場所の噴水の所に・・・

（・・・あれ？）

・・・噴水の前に秀吉によく似た女の子がいた。言うなら...そう。秀吉が女子の恰好をした感じだ。服は中央は黄緑、袖の部分は白色、下も白のスカートだ。

（ひょっとして、木下優子？）

まさかな。髪型が秀吉だから違うな。秀吉の真似をしているのかもとも思ったが、する意味がない。

「あ！真也」

と考えているうちに秀吉？がこっちに来た。

「？どうしたのじゃ、一体？」

「ああ。秀吉・・・だよな」

一応確認しておく。

「ん？なにを言っておるのじゃ？あたり前である」

うん、紛れもなく秀吉だな。恰好以外。

「ああ。悪い。待たせたか？」

「いや、それほどは待つとらんが…」

とここで顔が暗くなった。まあ、だいたい見当はつくが。

「真也が来るまでナンパされてしまった」

やっぱりか。

「まあしかたないだろ。秀吉はかわいいしな」

その格好もあるし。

「か、かわいい／＼／」

「うん。今は完璧女に見えるぞ」

「そ、そうか／＼」

あれ？秀吉この言葉に反応するはずなんだが？
さて、そろそろ聞くか。

「で、なんだその格好？」

「い、いや、これはじゃな！その、今回買うものは化粧品やら小道具じゃろ！だ、だからこっちの方が得かと思つてな！（それにこっちの方がデートっぽいしのう）」

ああ。割引とかもう一品とかのサービスか。さすがだぜ。演劇のためにこれほどのことをするなんて。
だが、秀吉最近なんかブツブツ言ってるなあ。まあいいか。

「ど、どうじゃ？」

「？なにがだ？」

「その…に、似合うかのう？」

何？そのデートに行く時のお決まりの言葉。つてさっきの「待った？」もそうだ。

まあ、これくらいいいか。

「ああ、似合うぜ」

「そ、そうか／＼よかった」

・・よかったってなんだ？

「そ、それでは少し早いが行くか」

「おう」

まあいいか。とにかく楽しむか。

「どうだ？」

「うゝむ」

秀吉のお眼鏡にかなうものがないらしく、さっきからあっちこっち回っている。

「…だめじゃ。どれも使ったことのあるやつや古いのもばかりじゃ」

…それって、化粧品とか使いまくってるってことだよな。

「うゝむ」

「そこのお客様」

ん？店員さんか？

「む。わしか？」

「お悩みなら、こちらなどいかがでしょう？」

そう言つて化粧品を渡す店員さん。正直俺には何がいい、悪いはわからないから完全に空気である。

「む。これは知らないやつじゃ」

「これなら、あの彼氏さんもメロメロですよ」

「そ、そうか！」

…耳打ちしてよく聞こえないがなんか話がおかしくなってる気がする。

「では、それを貰おう」

「はい。ありがとうございます」

・・・あの店員さん、すごい商売上手だ。

「またせたな、真也」

「ああ」

結局買ったのか。

「のう、真也」

「ん？」

「今度暇があつたら、その、演技に付き合ってくれぬか」

今度は演技にかよ！まあ、俺も演劇嫌いじゃないからいいけど。

「暇ができたらな」

「う、うむ！ありがとうございます（せっかくの化粧品、真也に見てもらいた

いしの)」

さて、時間はつと。昼だな。

「買い物は終わりでいいか？」

「え。あ、ああ」

「んじゃ、飯食って帰るか」

「あつ。そう、じゃな」

…ん。やっぱり寂しいかな。まだ昼だし。
よし。

「じゃあ、飯食って、少し遊ぼうぜ」

「！… うむ！」

よし！そうと決まれば早速行くか。

「ふう、結構遊んだな」

「そうじゃな」

あの後飯食ってから、買い物したり（今度は本やアクセサリなどの雑貨屋）ゲーセンに行ったりして遊んだ。今はもう夕方だ。

「少し疲れたのう」

「あ、それならなんか飲み物買ってくるよ」

「ああ、すまぬ」

そうして俺は自販機の所に買いに行った。

秀吉 Side

「ふう」

本当に疲れたが、心地いい疲れじゃ。真也は行ってしまったし、どうするかのうち。

「お、その彼女。一人？」

「だったら俺たちと遊びにいかねえ？」

…またか。朝といいどうしてこんな奴らが出てくるのか。

「すまんが連れがいてな。他をあたってくれ」

「んなこと言わずにさあ。ほら、君みたいな娘を一人にする奴なんかほっとけて！」

「そうそう。俺なら君みたいな娘相手なら一時も離れないぜえ」

「あ、お前一人先にくどくなつて！」

しつこいのう。

「じゃから、わしは遠慮すると…」

「ほらほら、行こうよ!」

「今日は返さないよ。なんてな!」

断ろうとしたが、途中腕を掴まれ強引に引つ張られた。

「やめっ、離せ!」

「お、強気なところもいいねえ」

「どんな君でも素敵だよ。ギャハハハハ!」

っ。真也…

「おい。あんたら俺の連になにやってんだ」

秀吉Side END

まったく。ちょっと目を離すとこんなことになってるからな。

「ああん。なんだお前」

「もしかして、彼女との仲良しぶりに嫉妬したの?」

「そう思うなら脳外科に行くことを勧めるぞ」

嫌がつてんのが見えないのなら眼科に行った方がいいがな。

「んだとてめえ！」

案の定殴りかかってきたな。向こうから手を出してきたならこっちも好都合だ。

「真也！」

秀吉が叫ぶが

ガシッ！

「んな！」

俺は殴りかかってきた拳を掴み

ギリッ！

思いっきり握ってやった。

「ギャア！」

ナンパ男が悲鳴を上げて後ろに行こうとしたので手を離してやった。

「さて、どうする。まだ続けるか？」

そう脅すとナンパ男A、Bは逃げて行った。

「大丈夫か秀吉…っ」と

無事を確認しようとしたら秀吉が胸に飛び込んできた。

「…あり、がとう」

「…おう」

無理やりだったしな。不安がるのは当然か。
そうしてしばらく秀吉は俺の胸で震えていた。

「大丈夫か？」

「うむ。すまんだな」

「気にすんな」

と言って頭をなでる。

「そういえば、わしらが初めて会った時も助けてもらったの」

「ああ。そうだったな」

今みたいに俺が割り込んで殴られかけて殴り返し脅したんだっけ。
んで逃げてったんだよな。

「ありがとう。真也」

「っ。ああ／＼」

「?どうしたのじゃ？」

「いや／＼なんでもない」

言えない。夕日に照らされた笑顔が、すごく綺麗だったなんて。

「ああ、そうだ。これやるよ」

そう言っただけはさっき買ったアクセサリを渡した。

「これは？」

「お守り。プレゼントだ」

「いいのか!？」

「ああ。遠慮なく受け取ってくれ」

そう言っただけは秀吉はまた笑顔で

「ありがとう」

と言った。

その時の笑顔はアクセサリの光もあり、より綺麗だった。

翌日

「おはよう。秀吉」

「おはようじゃ。真也」

「なんだもうアクセサリー付けてるのか」

「お守り、なんじゃろ？」

「そうだったな」

そんな会話をして登校した。

ガラッ

「おはよう」

『異端者には死おおおおおおお！！』

…覆面かぶったおかしな奴らがいた。

「・・・なにやってんだお前ら」

「なんじゃこれは」

一歩遅く秀吉も入ってきた。

「なんの騒ぎだ」

「しらばつくれるなあ！！！貴様が異端審問会の血の盟約に背いたのは知っているんだぞ！！！」

「知らんがな、んな盟約」

別に俺、異端審問会に入ってるわけじゃないし。

「これを見ろおおおおお！！！」

さつきから叫んでばつかなこいつ。須川か？

「別に大声じゃなくても聞こえ・・・ってこれは！？」

俺と秀吉秀吉が楽しく買い物したり慰めて抱きついている写真があった。

「なぜそれを！？」

「とある協力者からもらったものだ！！これで言い訳できまい！！」
言い訳も何も聞く耳もたんだろお前ら！というかいつの間に撮った

！！

「真也ああああああ！！」

「うわあ！お前、明久か！」

なんでこういときだけ早く来るんだよお前！

「信じてたのに！！信じてたのに！！いいいいいい！！裏切り者お
おおおおお！！」

「知るか！！」

『裏切り者に死を！！異端者には死を！！』

駄目だこいつら！

ここはやはり王道的に

「逃げる！！」

『待てええええええええええええええ！！』

くっそお！！

「ムツツリイニイーーーー！！」

俺は恨みを込めて叫んだ。

一方

「木下君。OHANASIしましょ」

「ひ、姫路。何を言っ…」

「ひ・で・よ・し」

「あ、あああ、姉上？」

「向こうで少しOHANASIしましょ」

「木下さん。私も混ぜてください」

「あ、あんまりじゃー………!!」

この日の朝、2人の男子生徒の絶叫が学園中に響き渡った。

PV3万、ユニーク5千前まできたことに初めて気がついたので番外編をまとめ
オリジナルは難しいねえ。

「…これ、オリジナルか？」

実はちょっと元ネタあり。バカテスのドラマCDのね。

「買ったのか」

友達のから聞いた。

「借りたのか」

うん。

「で、後2つは？」

1つは同じ番外編。もう1つは前から言っていたリリカルとバカテスの
コラボを少し書く。

「本当に大丈夫か！？」

大丈夫。プロローグって言うか、紹介みたいなものだから。

「文句もらっても知らんぞ」

…ダイジョウブ、ダイジョウブ。

「急に暗くなりやがった。本当に大丈夫か？」

みなさん、見ていてくれてありがとうございます。これからもうろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1884v/>

バカと楽しく過ごしてく

2011年11月12日11時30分発行